

---

## まえがき

「わからないからおもしろい」

震災の年、黄色い月見草の花が綺麗だと心に入ってきたのは、5月になってからでした。1月17日午前5時47分から、自分を見失っていました。今起きている事は何か。実行できる事は何かと、心にゆとりがなくなり、自問自答の海に溺れていました。路傍に咲く黄色の月見草が、こんなに綺麗だったとは。

人には、色々な感覚があります。心がリラックスした時のみに、その私の感覚と世界は対話できます。一方、追い込まれた状況ではできません。震災後、その自らの感覚と世界との対話ができなっかけは、5月の黄色い月見草が、綺麗だと思ったその刻からでした。過酷な状況から、私自身が素に戻る事が出来た刻でもあります。

お茶事に参加するため、京都東山の西行庵を夜明け前に訪れたことがあります。

まだ暗がりの中、茶室に入っていきます。床柱にそっと添えられたかのように燭台のろうそくの灯が揺らぎます。焚かれたお香からはうっすらと甘い香りがします。部屋が白み始めると、東山の鳥たちの鳴き声が、あちらこちらで響きだします。茶室の中に座っていると、暗さは明るさへと変わっていきます。

障子が明るくなり、畳、天井、壁が明るくなります。その素材と色の違いで、微妙な変化が絶えまなく続いていきます。掛け軸の西行法師のお姿が浮かび上がっていきます。茶釜には、火がくべられていて、暖かさが伝わってきます。湯気が白い蒸気となり、湯音が絶え間なく弾みます。亭主が、茶せんで薄茶をリズムカルにたてる音は、鳥の鳴き声とシンクロします。蠟燭の灯りは、桜の花びらがうがたれた燭台の影を、畳の上につろわせませます。

茶室にいと、人の所作や構え、道具、設えが自然と寄り添い一体となっていくきます。まるで私自身の存在が消え失せ、周囲と一体化し、今という時間が絶え間なくまったりと流れていくようです。

この経験は、スケッチに描けません。

ひとりの人間と世界の関係は、1対1の関係ではありません。その余白こそ、興味がつきません。好奇心という大きな海原が私の中に広がっています。

見る 観る 診る 視る 看る 覧る

正しくみることは難しい。

物事をみて理解することは、自己の意識を通した結果でもありません。その意識が、曲者です。往々にして、視覚を通してみていることと、理解していることにはギャップがあります。思い込み、コンプレックス、体調、感情などが、阻害します。素直にみることは、子供の頃には出来たはずが、意識しないと大人には出来ません。

「みる」ことは、理解することに繋がります。私は、自分と向き合い、世界と対峙し、素直に見ることから全てが始まります。

自分なりに手と心を動かし、アウトプットをし続けることは、自分なりの世界を探求す

ることとなります。自分にある内蔵センサーが、オリジナルセンスを作り出し、無意識の意識化の先に世界が広がると考えています。

旅をすると、自らの日常の空間や場所から、距離が出来ます。それが、自らの意識を客観視させます。世阿弥が言う、離見の見を、物理的に行っているようなものです。ヨーロッパやアメリカに行くと、日本が見えます。アジアの国では、日本との差異を実感します。旅こそ、自分、家族、仕事、日本とは何かを考え直すきっかけとなります。それを、作り続ける事が大切です。自分の世界を広げるために。自ら自身の枠組を壊す作業が、ある年齢以上は大切になってきます。

ふと感じている自分が、楽しい。何か新しい見方を、発見しているのでしよう。無意識にいいなと感じた事が、時間を経て、スケッチや写真となり、ビジュアルが自らを刺激します。自分に寄り添い、自分の感覚、感情、記憶をも呼び覚ます無意識の海は、ブルーオーシャンに見えます。